



意法唱

岩崎氏樵之南紀有田の郡廣備此
系生に於て壯年の昔より樵業の門に
入て正風の流傳を學ぶ事廿餘年也業乃
変化を以て乃傳あるを思ひてその文を
よりその書を友とてやりて史を

かけたりと云ふ那りてと云ふ事書を方一
去のむ秋の月の折るふおくれす事と云ふ
扱ひおれりて一理方通乃さ理とわたり
連社の上より云々一症候補ひきおれり
それ後幾ふおくれして以雅乃道業
四季折く乃風光りて云々云々
中にも云々云々云々毎日も云々云々
此の云々云々云々然るふ天明申六月十九日
病床日記折るく折るく終り世と云り
りされ一親族の人の歎ふと云々云々

以雅の病る事云々云々におく一人と云々の
文と云々一書と云々云々章と云々云々
おくれと云々云々我と云々其比と云々の
市店とありと云々折るふ事と云々云々
云々云々に折るふ事と云々云々
信情を何れかする毎日のは補傷と云
名社折る事と云々云々念那と云々
と云々云々云々云々追名追悼乃
折る事と云々云々云々書如云
あつと云々云々乃云々白雲と云々云々

樞也、書るるを以て其の末へ
 あらわしき、此れさきく方池朝冠志
 にもと十華尾乃、其の末へ



寛政二年 庚戌六月



追悼 名録



このおまつのかげの懐ある日の
 多よりおや痛め申すと復 哀
 嘆く事の外は世にもいとあはれ
 おふねのやぶり乃れ意気
 力がたゞ盡れおれけと悼のりら
 末秋もたてこゝれやはまの
 伴乃れをよれれつ蓮花露

談笑菴 許卓
雪推菴 波犬
 序 唼 喜翁 路達 沙光 里夕

極不のぬよりを凍し蓮糸不
なさんぞたしむる葉や花の時
急らりの庭よりあつて
庭は世とひりともあやまらぬ
中へに見えぬかたや予の泣

蘆郷
僧 羅木
素丈
龜郷
女 琴上

は浦をこりて人のたけは
凡雅のさしやまひて
昔情もいともく爰文章ふおも
ものこりてあやむにむし
心掛く時を越えあやむ形れハ

おろしあやむ
時おとさ言ふひりたえ
あはれあやむ推え乃あ
あく那りあやむのほ

蝉を鳴くあやむ
あき人あはれ
あはれあやむ乃あ
あはれあやむ乃あ
あはれあやむ乃あ
世を秋乃風を物して桐一系

ヒロ女 燕志
千田女 里楓
全女 枝栄
スハラ 怒考
日高 聴雨 杉那

かきしと乃手とあれを洋城
まきとと海にか一子扉
輝も中くお能智あ力
橋もあしと白ん ち徳
さうりさく乾ちと世や
輝もそと衣 部さう
あまの仔の顔か又
と句あしとあまの技
もさうく

文通

まきと入しとさうと
神志自れ世と夕
りんとせとあて
は骨と名あ人乃

枕門中のき
招き
やひ
毛と
毎
るの
悔
ま一
や
な

杉曉

ト推

岸秋

里丈

左臨房

木腦

留濱

以系

東武

鳥明

輝牛

乙駱

栄壽

東洞

終つてあつて情おこしあ人の
命短かきと暫くやうか表はさ

~~~~~

冬よりりとるんせり

雪の意あつり

二権庵

五一二年と二権老作、これ吟杖の

おろく東洞里まゝたれり

かきよひのくひのさきあやせり

飄吹

短歌行

二回忌法延

二序乃浮世や夏も夏も

許草

風のさきよりよきこと侍

去春

怨怒を晴とけり子郎と

波父

名貴乃あれぬかゝるは

聖上

うきく〜樹るよ月のさ〜り

魚志

秋の〜名と命〜

瘡つ



のの葉のうらうら時乃れそく

亀六

季うらふきこ 山女の歌

芦心

多舟用とすゆゝおてけりかゝり船

菜土

ナハヒとくく階お市町

卜推

唐ちくも白くく世の雲をく

如毛

田舎も昔と時多世代

杉院

足東のあゝ日なふくはき

芦由

むすおの神をいのるかけ橋

樟中

杉ふりいれぬぬく嘆お思ひ

可考

よふきよふくても昔の丸茶

辰木

濃舟能席六舟子孫くハセ

怒考

祝く見事々々成音屋

星文

見を達踊りお揃ふ食乃月

河達

ササも桔梗し一しれおき

津枝

舟の音おきまらちよらくくと

舟心

庭の掃除表隅、隅まで

芥心

紙船のきく信長をさきけり

一籠

百鶴りの讀物おき

沙光



洞見枕之と正恩の何れも  
あそびく、家回帰の信者  
あり〜のあそび乃芳遠れ  
か〜世と世の〜をたり  
され〜の信もた〜むと  
はさ遠先達をた〜る  
之回忌乃墓〜の信  
宗のあり〜の信と  
撰集〜の信もた〜む

十巻  
素子

〜の信もた〜む  
あり〜のあそび乃芳遠れ  
か〜世と世の〜をたり  
され〜の信もた〜むと  
はさ遠先達をた〜る  
之回忌乃墓〜の信  
宗のあり〜の信と  
撰集〜の信もた〜む

12



也くしうより 疎く梓の  
何の及く 此の及く  
孫よりぬく 縁の事等  
年よりと家に 行くまう也

日吉浦

抱く水くまを志の秋葉が

湖浦

四季混雑

晴とまて 秋の事  
うしろの事 秋の事  
秋の事 秋の事  
秋の事 秋の事  
秋の事 秋の事  
秋の事 秋の事

月二  
秋の事

秋の事

秋の事

秋の事

秋の事

秋の事

秋の事



山崎 洲ねくおきおが 花の子  
 只一ねきくおのめい  
 夕 暮よとよくくくく  
 夕 暮目ととちる人の  
 世海一の程と 龍や海  
 万石のそ屋所きく  
 宵月ととととととと  
 名月やとととととと  
 雄抑乃休ととととと

この坊  
 柳之  
 立  
 立  
 立  
 立  
 立  
 立  
 立

難りの名抑除く  
 妻前や  
 うきく  
 川  
 巨  
 其  
 其  
 其

樞之  
 利刀  
 立  
 立  
 立  
 立  
 立  
 立



十番 虎の人のありぬ

ササキの歌えせや見舞と月

およりもあよとやうらうらとあや

多うよふもあやうらうらとあや

草花やうらうらに信と福一つ

五つうらの文通

晴りののゆるあよとあやうら

あ~~~~~とあやうらうらとあや

夏さくの手物あやうらとあや

あ~~~~~とあやうらうらとあや

亀

ワカ山  
土橋坊和因

名高甫曾原

信 羅木

里夕

龜六

杉院

芦心

丁片

森者

ト推

一瓶

斧仙

波丈

全

女 琴止

全

ヒメ女 燕志

能の儀やこまと初逢ひ

数玉や神の松も雪持日

雨化露とあ~~~~~とあや

流りらの流よりあ~~~~~とあや

乞喰のあ~~~~~とあ~~~~~とあや

牛の首よね張りせとや大振り

積りばむとあ~~~~~とあ~~~~~とあや

多梅や鈴白よ~~~~~とあ~~~~~とあや

一~~~~~とあ~~~~~とあ~~~~~とあや

山吹の垣をく~~~~~とあ~~~~~とあや



かき 梅はけの梅よと秋  
庭 しのをきおるぬれて花のこ  
千草よく風やせると庭はり  
陰 庭やの 津子すけてきや  
くろく乃里も近し雛子の姿  
ふりし庭はるハ咲く梅月  
梅 咲くや松乃梅の動くは  
名月やさし〜ハちよよ多し  
と 乾 陸のこ 梅 梅のこ  
鬼子く人十ハもあよむ花  
全 巨母

燕志

海蓬

嘉山

千田  
女  
里帆

如色

女  
里梨

芦由

龜心

巨母

全

行 春や修智の下向ニあられ  
梅 家乃芥の中や花のむ  
ふとよむ花とも〜ぬ 梅  
拙 家んぬりや山さくら  
いしち〜〜〜ふ〜〜〜梅  
あ〜〜〜ふ〜〜〜梅  
半 葉 遠は〜〜も〜〜も  
尚 香乃 断〜〜も〜〜も  
二 庭 山 行 熱 後 日  
り〜〜のんえ〜〜梅

席塗

梅沖

女  
宇奈

岩丸

孝ハ

梅之

全

梅子

全



柳よ 藤又 菖蒲も や 秋の け  
むのうけ 物 喰ひ 揚 敷 持 せ

東武一三乃 秘伝 といふ 所の ありき

芦花 葉乃 落 吹く 思 子や 千 ち ち  
花 あり 子 び 門 叶 び ぬ 柳 梅  
秋 ち ち 柳 ち ち ち ち ち ち ち  
柳 ち ち 柳 ち ち 柳 ち ち 柳 ち ち  
か ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち 柳 ち ち ち ち ち ち ち ち

菖蒲

三

亀心

二 桃 鹿

全

鹿 白 鳩

全

菖 蒲

葵 扇

赤く さいく の ち の 柳 ち ち ち ち ち  
柳 平 け ち ち ち ち ち ち ち ち  
入 月 の 夜 の ち ち ち ち ち ち ち  
ち 柳 ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
眠 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
柳 子 唱 ち 山 幽 ち ち ち ち ち ち  
柳 変 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

柳 木

荷 露

呂 園

其 它

等 柳

管 角

白 梨

石 二

全 費 己

全 天 口

郭 云



ふらふらあつそめ

楠あつそめ控かくせ蓋の月  
踏迷ふと道う徳あつ中のそ  
川舟の帆さう見えぬ夜うふ  
麻るや席をさうさうそと島  
風や白帆とこ目を東の中  
雪や降る子うそつと指の穴  
隣の子かつて娘の梅えうふ  
ちのちおろし研を向うや空のぬ

スハラ  
里丈

日方  
二嘯

々  
雅石

々  
分滯

水  
達十

日方  
有之

々  
湖笛

々  
ちのち

宗寺町ニ赤  
橋屋治兵衛板



